

“届けよう、服のチカラ”アワード2023 受賞校 おめでとうございます

【最優秀賞】

小学生の部 静岡県立浜松視覚特別支援学校（静岡県）

中学生の部 草津市立松原中学校（滋賀県）

高校生の部 広島県立尾道商業高等学校（広島県）

【優秀賞】

館山市立九重小学校（千葉県）

天理市立前栽小学校（奈良県）

さいたま市立美園南中学校（埼玉県）

岸和田市立北中学校（大阪府）

岡山県立玉野光南高等学校（岡山県）

【UNHCR特別賞】

名古屋経済大学市邨高等学校（愛知県）

【最優秀賞】 ～小学生の部～静岡県立浜松視覚特別支援学校（静岡県） 僕たちが変われば、世界が続く エコ活プロジェクト「ひとがずっと ちきゅうがずっと」

生徒による発表（小学6年生）

【スペシャルメッセージ】

『僕たちは世界のどこかで苦しんでいる難民の人たちの未来が、より明るく豊かになるように、最後まであきらめないでほしいと思っています。そのために服を集めることに協力してください。』

僕たちが考えたこのスペシャルメッセージは、いつも活動の中心にあった。

【取り組み】

6月：

プロジェクトが始まった。僕たちにできることはない。どうせ服は集まらない。僕は最初あまりやる気が起きなかった。しかし、僕は途中からこのプロジェクトはやらなければならないんだ！と思うようになった。そのきっかけは、難民の人たちについて勉強したことだ。難民の女の子の手紙を読んだ。手紙から辛さや悲しさを知り、とても苦しい気持ちになった。

そして僕たちは【スペシャルメッセージ】（上述）を作り、「やるぞ！」という気持ちになった。

9月：

プロジェクトを学校のみならずに広めるためにチラシを作成した。パソコンの使い方を覚え、点字だけでなく、普通の文字のチラシも作った。

10月：

僕たちの思いを地域のみならずに直接伝えるため、出前授業を行った。初めての場所、たくさんの人の前での出前授業は緊張した。僕一人ではできなかったが、この隣にいる友だちと一緒になら、きっとプロジェクトを進めることができるかもしれない。と考えたら少し力が抜け、楽しくなり、頑張ることができた。

11月：

毎日のようにたくさんの人が服を持ってきてくれた。僕が着る服をもらったわけではないのに、なぜかわからないけど、とても嬉しくなった。3011着の服を集めることができた。僕たちの思いがたくさんの人に伝わり、活動が広がったと感じ嬉しかった。服を畳み、段ボールに詰めるときは、全校生徒や先生たちも時間を作って手伝ってくれた。僕はみんなの優しさを感じ嬉しかった。難民の人が一人でも多く助かりますように！という思いを込めてトラックに乗せた。

【活動後】

このプロジェクトを通して、難民キャンプで子どもがタンクを持って井戸から水を運んでいるということを知った。

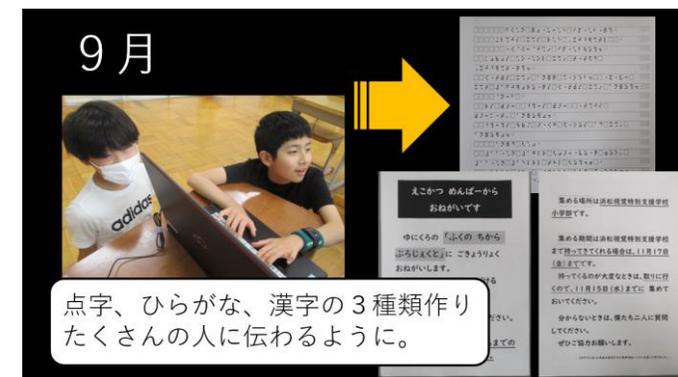
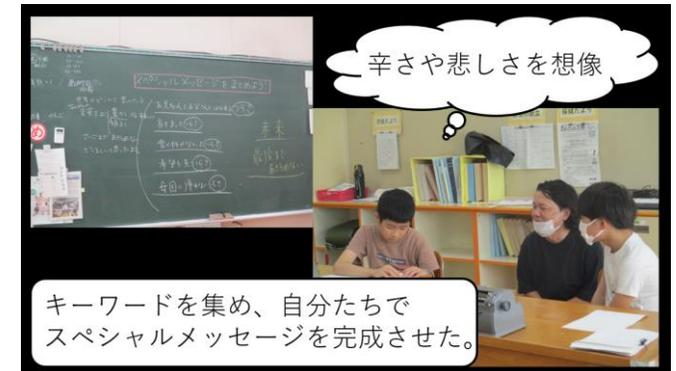
僕だったら負担にしかならない生活を仕方なくしている人たちがいるということ。

当たり前が当たり前じゃない人たちがいるということ。を知った。

僕はなんとかしたい！と思い本気でプロジェクトに取り組んだ。その中で友だちと協力することの大切さも学んだ。

「僕たちにできることはまだあります！」もっと難民の人を応援したい！人のために動きたい！

そのために人とのつながりを広げ、新しいことにも挑戦し続けたいと思う。



【最優秀賞】 ～小学生の部～静岡県立浜松視覚特別支援学校（静岡県）

活動詳細

【活動のねらいと身に付けたい力】

「僕たちには誰かを助けることはできない。」と言う児童達が、自分の考えを発信することで、人とつながることや、一人ではできないことも、周囲の力を借りてやりることができる姿を目指した。

中心になった6年生2名（点字使用者）は教育課程が異なり、その学習内容や生活経験も違う。それを踏まえた上で、このプロジェクトに共に臨むことで、互いの良さを認め合い、補い合いながら難民支援の輪を広げていることを目標とした。

- 難民支援プロジェクトを通じて、世界に目を向け課題を発見する力
- 見つけた課題を自分事としてとらえ、対応する力
- 様々な人と関わり自分の意見を分かりやすく発信する力

難民支援の根拠となる客観的な資料を授業で扱い、難民の現状や、数値的な推移も鑑みて、当事者の立場になって考え、自分の言葉で支援の必要性が発信できるよう、支援の受け手は自分達と同じ子ども達であることを意識して活動をすすめた。

【活動内容】

- (5月) SDGsの学習をスタート。近隣のリサイクルエリアを調べ、ユニクロ店舗にリサイクルboxがあることを確認し、服を集めて店舗に持参。スタッフから本プロジェクトを紹介される。難民と服の繋りが分からず、訪問授業を児童達が希望する。
- (6月) 盲学校ということで、訪問授業時に画像を言語化して説明して下さったことで、6年生が中心となり子ども服集めが始動。児童の意見から文字と点字と音声のチラシを作成し録音した音声朝と下校時に流した。
- (7月) 一か月後に集まったのは20数枚。この結果を踏まえて、「なぜ子ども服を集めようとしているのか」「難民は何に困っているのか」を再度学習することとした。
- (9月) 学習経験の異なる6年生2人が、難民という立場にある人々に向けたメッセージを作成することに。
- (10月) 全校集会の場で難民についてのプレゼンと、服回収の協力を呼び掛けた。学校公開日に教育・福祉関係、地域の方々に向けてもプレゼンを実施すると、この取組みに賛同して下さる方々が協力を申し出てくださり、県内の小学校からもオファーをもらう機会を得た。
- (11月) 他校に赴き、プレゼンする様子を新聞社に取材依頼を行い、翌日に記事が掲載。その後は問い合わせを多くいただき、点字の手紙や、持参して下さる方のあたたかい言葉に勇気をもらう。

○学年：特別支援学校6年 2名

○活動の枠組み：「総合的な学習の時間内の学習」エコ活タイム

【成果や今後の展望、アピールポイント】

自分発信で参画できるという体験を通して自分も社会の担い手の一人であることに気づき、自分で考え、合意形成を経て大人に協力を依頼しながら実行するという姿が大きな成果。

①教科等横断的な学び・学年間のつながり

年々在籍数が減少傾向にあり、空白学年が存在している。教育課程も学年相応の教科書を使用した課程と、生活に根付いた活動から学ぶ課程があり、学習経験の異なる児童が共同で取り組むことで、結果的にこのプロジェクトが、教科横断的に学ぶ機会となり、カリキュラムマネジメントの好事例となった。

②波及性・地域とのつながり

本校は居住地域から離れて学ぶ児童が多く、地域とのつながりが作りにくい状況にある。今回の取組をきっかけに、地域の小学校2校へプレゼンに赴き、後日当該の学校で集めた服を、受け取りに行くことで、地域の児童と繋がる糸口ができた。また、SDGsの情報交換をした学校が集めているペットボトルキャップを、6年生が自主的に集め4キロ分を先方に届けることもできた。6年生の思いを受け取った学校周辺の地域の方々や、教育・福祉団体、マスコミ等の皆様が、難民支援の輪を繋げる役割を果たしてくれた。

③児童生徒の主体性・行動変容

2人は点字で学習をする児童であるが、チラシ作成時に点字だけでなく、文字や音声でのお知らせの必要性を感じ、パソコンのキーボードの配置を覚え、音声読み上げ機能を使って、文字入力する方法を練習したり、録音機器やスピーカーの使用を大人に援助依頼をしたりできるようになった。また、服が集まる度に枚数にこだわらず、「これで〇人の人が困らなくなるいいね。」と2人で言葉を掛け合う姿がみられるようになった。

④学校独自の創意工夫・オリジナリティ

盲学校だからこそ、見えない見えにくい人にも情報が伝わる工夫や、文字が読めない人、漢字が読めない人等の多様なケースを考えて、児童自身の発想で様々な媒体を使って、難民支援を呼びかけることができた。



大勢の前で難民についてプレゼンを行った。2人の考えたスペシャルメッセージは多くの人の心に響いた

20数着だった子ども服は、子どもたちの思いや願いとともに支援の輪が広がって、3011着となった



【最優秀賞】～中学生の部～草津市立松原中学校（滋賀県）

～超戦～わたしたちが世界のためにできること～

ちょうせんの「超」は当て字である。これは今年度の本校生徒会のテーマでもあり、限界を「超」えて挑むという思いが込められている。自分たちで考え、自分たちで行動するという活動の目標をテーマに込めた。

生徒による発表（中学2年生）

【活動前】

プロジェクトに参加するにあたり、先生にポスターの提示やboxの設置を提案しても「ええやん。誰が許可もらう？」という反応はしてくれるが、何もしてくれなかった。

・・・先生が協力してくれない・・・かつてない衝撃に私たちは戸惑った。このプロジェクトはどうなるのか。

【取り組み】

自分たちでやるしかない。という覚悟を決めた私たちは自分たちの力で活動を開始した。

- ・回収ボックス設置の候補先にアポイントの電話をかけ、訪問。プロジェクトの説明と回収ボックス設置の依頼。断られることもあったが、交渉を続け、15か所に回収ボックスを設置してもらうことができた。
- ・多くの人に取り組みを知ってもらうために、ラジオ局にメールを送ると、2つのラジオ局が返事をくださり、ラジオ出演が実現。
- ・文化祭での発表や校内放送で他学年への呼びかけも行った。

その成果として7,234着の洋服を回収することができた。

回収した服は2年生全員で体育館に運び込み、Tシャツの形に並べ集合写真を撮り、仕分けと梱包作業を行った。

そのときの様子は地元テレビ局のニュースに取り上げられ、偶然番組を見ていた滋賀県知事から激励のお言葉をいただいた。

【活動の成果】

★成果その1：コミュニケーション能力の向上

プロジェクト中、学級の仲間や地域の方など、非常に多くの人と関わる機会があった。

自分たちでやるしかない状況が責任感と使命感にかわり、今後につなげることができた。

★成果その2：地域との強いつながりを得た

終了後には、地域の方から「またやってほしい。」という声や、思い出の詰まった服が再び誰かの役に立つ。

という喜びの言葉をいただき、難民キャンプだけでなく、身近な人にも貢献できていることがわかった。

★成果その3：達成感

自分たちの活動が地域や世界の役に立ったことに感動した。

自分たちで考え、行動したからこそ、強い達成感を得られたと感じる。

中学生の私たちでも世界の役に立てたという自信を、世界の様々な問題に立ち向かう勇気としたい。

プロジェクトを通してこのような体験ができたこと。そして、関わることでできたすべての人に感謝の気持ちでいっぱいである。

私たちが学んだことを多くの人に伝えることで、持続可能な社会に向けて、共に行動ができる仲間を増やしたいと思う。

自分たちのチカラで活動スタート！



電話で打合せの設定



箱を持って現地へ



説明と設置の交渉



無事に設置できました



生徒感想文

○このプロジェクトは、相手だけではなく自分たちもすごくうれしい気持ちになるし、達成感もあっていい！

○話し合いから始まり、そこから地域のお店や施設に広がって、メディアに取り上げられて、最後は世界の困っている人に届くという活動に参加できたことが誇りに思う。

○世界の難民の役に立つことは不可能だと思っていたけれど、自分たちの力でこれだけの成果が出せたことに感動しました。これからも、いろいろな活動で役に立てたらいいなと思います。

【最優秀賞】～中学生の部～草津市立松原中学校（滋賀県）

○学年：中学2年 146名
○活動の枠組み：総合的な学習の時間

活動詳細

【活動のねらい】

活動の中でもっとも大切にしていたことは、**生徒の主体性**である。

自ら考え、行動し、成果につなげるという一連の取組が生徒たちの自己有用感を高め、その経験が生徒の問題解決能力につながることを期待して活動に参加した。

生徒たちがアイデアを出し合い、自分たちで行動をすることができるよう教員は見守りの体制を崩さずサポートに徹した。難民キャンプの存在は知っていても、どこか遠くの国、自分にできることなんて…という思いの生徒は少なくない。そんな思いを払拭し、まずは自分たちの身の回りから、そして地域へと活動を広げ、世界のために何かができるという達成感を味わわせたい。

【活動内容】

★7月～夏休み

目的を達成するために何をやるのかのアイデアを出し合った。

アイデアの中に回収ボックス、告知のポスター作りがあり、生徒たちは授業での活動以外にも休み時間や放課後、夏休み期間を利用して積極的に準備を進めた。

★9月 服を集める活動が本格化

★10月

回収ボックスを設置した施設から「箱がいっぱいになったので回収にきてほしい」という依頼が多く寄せられるようになった。依頼を受けて生徒が手分けをして回収に向かうこともあったが、量が多いこともあり、安全面の配慮から教員も協力しながら回収を行った。回収は10月末までとした。

★11月

回収した子ども服の仕分け、梱包作業を2年生の生徒全員で一斉に行った。

集まった子ども服を体育館に運び込み、Tシャツの形に並べ集合写真を撮り、予想をはるかに超えて集まった服の量に達成感を味わうことができた。

その後に行った仕分けと梱包の作業では、服の枚数もカウントし、対象外となるものを除くと7,234着もの子ども服が集まったことが分かった。

【成果や今後の展望、アピールポイント】

①教科等横断的な学び・学年間のつながり

本校では段階的に問題解決能力を養うためスクールESDに視点をのこした教育活動を全校で実施して2年目になる。難民キャンプの存在や世界の情勢について、社会科の授業の中で深めることができた。

②波及性・地域とのつながり

本校ではスクールESDの取組を「松原未来学習」「松原ローカル学習」の2本柱で行っている。今回のプロジェクトは2年生の「松原未来学習」としてグローバルな視点からの学習活動であったが、結果として地域と強いつながりができた。

③生徒の主体性・行動変容

活動を進める中で、同級生だけでなく、地域の大人たちとも話す機会が多くあり、生徒たちのコミュニケーション能力は大きく向上した。特に、回収ボックス設置の交渉に向けての準備では相手に内容を伝え、交渉を成立させるにはどう話せばよいかと積極的に議論しあった。交渉は教員が付き添わず、生徒だけであった。設置の了解を得て戻ってきた生徒たちからは自信に満ちた表情や達成感が見られ、成長を感じることができた。

④学校独自の創意工夫・オリジナリティ

生徒の自主性を大切にするため、本来なら必要だと考えられる配慮や準備を行わないようにした。回収ボックス設置の交渉ではアポイントを取る電話の時点で断られることもあったが、生徒は諦めずに次の交渉に向けて挑戦をすることが出来た。あえて教員がサポートしない体制が生徒に使命感と達成感を与えられたと考える。回収の方法としてはオーソドックスなものであったが、生徒が得た経験値は大きなものとなったと思われる。



地元ラジオ局での収録の様子。
本物のパーソナリティとともに質疑応答の形式でコーナーの収録を行った。

この日は新聞3社、
テレビ局1社が取材のため来校した。



【最優秀賞】～高校生の部～広島県立尾道商業高等学校（広島県）

～私たちが地球を救う～

課題研究 マーケティング分野の生徒主体に昨年の課題をSWOT分析したうえで、
計画立案～回収活動～マスコミへの広報活動も実施

生徒による発表（高校3年生）

私たちの住む尾道市は広島県東部に位置し、人口は約12万人。年間370万人の観光客がくる観光都市である。
尾道商業高等学校は135年を超える歴史を持つ商業高校である。

……みなさんは年間何枚の服を購入しますか？そんなこと気にしたことがない人がほとんどだろう。

当たり前のように服を買い、不要になれば捨て、新しい服を買う。しかし世界では当たり前服がある人たちがばかりではない……

難民は世界に1億840万人いると言われており、74人に1人が難民であり、そのうち41%が子どもたちと言われている。大きな社会問題である。
そこで、「私たちが地球を救う」をテーマに掲げ、活動をスタートさせた。

【去年の課題】

プロジェクトへの参加は今年で2年目となる。昨年の課題としてSWOT分析を行った。

S：強み（歴史と伝統・地域での知名度・商業教育によるビジネス思考・尾商生の行動力）

W：弱み（校内回収率が低い・子供服の保有率が低い（家族構成）・学校内の取組には限界がある）

O：機会（2年目で活動が広まってきた・昨年度の取組で課題が明確化・リサイクルやリユースが一般化）

T：脅威（島しょ部が多く全域に広まりづらい・洋服は「消耗品」というイメージがある・少子高齢化による子ども服の需要減）

【今年度の計画】

1.校内活動強化：出張授業には230名がプロジェクトや難民について学び協力して取り組むこととした。校内放送で協力を呼び掛けると、回収率が5倍となった。

2.ユニクロ連携強化：活動の場を広げたい。とユニクロ店舗に相談し、店舗にブースを設置し、プロモーションと服の回収を行った。

3.学校間連携：市内近隣の4校と2園でPR活動を行った。難民やプロジェクトを理解してもらい、活動の輪を広げた。

4.PR活動強化：地元メディアと協力し、地域に広く発信し、多くの人の共感を得ることができた。

【まとめ】

3009枚の回収枚数のうち、校内が1.6%で、校外が98.4%という結果から、地域全体に広めることができたと言える。

4月からスタートしたこのプロジェクトを通して、難民のこと・当たり前の生活のありがたさに気付くことができた。

2年目の今年はプロジェクトを伝えること。人と人をつなげること。思いを届けること。に取り組むことで、

「TEAM ONOMICHI」の協働体制の基礎を構築することができた。

私たちは卒業するが、このバトンを後輩に託し、日常化することで循環型の新たなライフスタイルを構築できると考える。

誰もが幸せを実感できる、持続可能なWell-beingな社会の実現のため、尾道商業はこれからもこの活動を続けていく。

04 今年度の計画

校内活動
強化



ユニクロ
連携強化



学校間
連携



PR活動
強化



私たちが地球を救う

広島県立尾道商業高等学校



生徒感想文

○1つは難民の人達の力になるために、多くの取り組みが実施されていると分かりました。

○紙芝居は「難民」をわかりやすく話すために、友人や先生に園児役になってもらい何度も紙芝居の修正を行った。実際、こども園に行った時の園児のまっすぐに紙芝居を見つめている視線を見て、うれしかったのと、もっと工夫したかったといろんな感情が芽生えた。保育士志望の私にはとても貴重な体験だった。園児たちが、「家に帰って服持ってくる」と口々に言う姿に感動した。

○プロジェクトに参加するまで、こういった内容で誰のためにしているのかよくわかっていませんでした。校外でのチラシ配りは、初めはなかなか受け取ってもらえず苦戦していましたが、積極的に声をかけると興味をもってくださる方が増え、たくさんの人に受け取ってもらうことができました。

【最優秀賞】～高校生の部～広島県立尾道商業高等学校（広島県）

○学年：高校2～3年生 30名
○活動の枠組み：課題研究 マーケティング分野、家庭基礎

活動詳細

【活動のねらい】

今年度も3年生課題研究マーケティング分野と2学年家庭基礎（家庭クラブ）で活動をはじめた。授業後、昨年度の取り組みの様子や先輩たちの課題をもとに、今年度どう取り組むかを検討した。校内でのテーマを「私たちが地球を救う」とし、より主体的に取り組んでいく方針となった。

【活動内容】

<授業>

7月に**教科横断**の取り組みとして、課題研究マーケティング分野（3年）と家庭基礎（2年）が参加。

<活動内容>

生徒自ら主体的に活動を進めていけるよう、チラシコンパや、回収箱を作製、プレゼン用PPの制作など行った。

<校内活動>

各クラスでプレゼンを実施し、協力を呼び掛けた。

また、各教室、職員室、玄関などに回収箱を設置し、朝のHRで校内放送を行う等工夫を行った。

<校外活動>

中学校を中心に各校に呼びかけた。市内4校の中学校に行き、各HR教室で直接プレゼンを実施。なかには、文化祭に招待され、中学生のみならず、保護者や地域の方々を前に、プレゼンを実施した。

★新たなチャレンジ

①地域の認定こども園や幼稚園に活動の場を広げた。

5歳児に向けて**紙芝居を作製し、読み聞かせ**を実施。5歳児にもわかるよう伝える工夫を行った。

その後、保護者の送迎時間に合わせて**チラシを配布**した。

②ユニクロ東尾道店との協働

ブースを作り、店内で呼びかけと回収を行った。プロジェクトの認知を高めるため、チラシ配布とともに、子どもに風船を配って呼びかけた。

<広報活動>

10月、地元FM尾道に出演し、活動について、回収について呼びかける。

11月、中国新聞の取材を受け、中学校での呼びかけている様子が記事として掲載される。

<成果>

ベビー服1,371枚、キッズ夏737枚、キッズ冬901枚、合計3,009枚（段ボール30箱）を送った。

<今後の活動>

服の回収等に協力していただいた地域の方々や中学生などにお礼状を送付。12月初旬に開催される尾商デパートで活動紹介や、服の回収、さらには、回収不可能な衣服のリユース譲渡を実施。

【成果や今後の展望、アピールポイント】

①教科等横断的な学び・学年間のつながり

課題研究マーケティング分野と家庭基礎（家庭クラブ）とで実施。具体的には、主計画はマーケティング分野の生徒で実施し、家庭基礎の保育の分野の学びの場として紙芝居作製や読み聞かせを実施。

②波及性・地域とのつながり

広報活動が大きく波及して近隣の方や市内外の方に服の回収に協力してもらった。

活動前から、「今年はプロジェクト実施してないのですか？」などの問い合わせ電話もあった。

③児童生徒の主体性・行動変容

計画・実施を生徒主体で行い、制作物もそれぞれ考え実施。校内や中学校でのプレゼンを行っていくうちに、「伝える」「伝え方」を考え、自ら工夫して行うようになった。そして自分の言葉で語れるようになった。予期せぬ出来事にも対応できるようになった。チラシ配布では、くじけず、配布を行い、そこから、新たな会話になり、コミュニケーション能力があがったと生徒は話していた。

④学校独自の創意工夫・オリジナリティ

30名近くで中学校へ訪問し、各クラスへの同時プレゼンを実施。

5歳児向けの紙芝居を作製・読み聞かせ、チラシ配布の実施。ユニクロ店舗での告知活動。

また、回収するだけではなく、回収衣服の中の送れない衣服をリユース譲渡も実施している。



ユニクロの店舗でチラシ配布と回収活動



5歳児に向けた紙芝居の様子

【優秀賞】～小学生の部～館山市立九重小学校（千葉県）

「小規模校でも『おもい』のつなぎ方を工夫すれば難民の子どもたちのための大きな一歩を踏み出すことができる！」
5年生たった8人での挑戦

生徒による発表（小学5年生）

【出張授業を受けて】

出張授業で服の持つチカラと、難民について、さらにはこのプロジェクトに参加することで、世界に貢献できることを知った。

最初は引っ込み思案で人前に出ることすら恥ずかしく、時には泣いてしまうこともあった。

私たちは、一番成長の早い幼稚園やこども園の子どもたちに協力してもらえれば、多くの子ども服を集めることができるのではないかと考えた。

5年生たった8人での挑戦がはじまった。

【取り組み】

①チラシや参加証の作成

チラシはわかりやすく、思いが伝わるように手書きで作成し、参加証は折り紙を使って洋服の形で作成した。

②市役所への協力

館山市のすべての幼稚園やこども園に協力を依頼するために、管轄する館山市役所の子ども課に電話で交渉を行った。緊張したが思いを精一杯伝え、快く協力いただくことができた。

③回収箱の作成

小さい子どもも洋服を入れたいくなるように、動物の形に装飾をした。

④地区のイベントでの協力依頼

引っ込み思案だった私たちが地区のイベントでステージ上からプロジェクトへの協力をお願いした。

【印象的だった言葉】

後日、市役所の方から「思いのほか、子ども服が重かった」と言われた。はじめは、たくさん回収することができたから重くなったのだろう。と考えていた。しかし詳しく聞いてみると、予想とは違う答えが返ってきた。まだ着られる服を「難民の子に届けて！」と持ってきてくれる方がたくさんいた。ということ。「持ち寄られた思いを確実に九重小学校に届けよう！」という思いの重さになっていったとのことだった。この話を聞いてさらに活動への意欲が高まった。

【活動後の変化】

多くの人の思いがつながる活動が私たちを変えた。

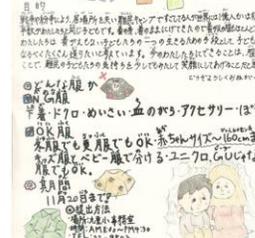
- ・考え行動し表現できる自分になった
- ・子どもでも、仲間と協力すれば社会に影響を与えられる自信になった
- ・引っ込み思案だった自分。本気になれない自分。と向き合い克服することができた

プロジェクトの活動を通して、これからの社会を生き抜く私たちに大きな影響を与え、私たち8人の一人一人の成長というチカラになった。
難民の子どもたちに服を送ることを通して、私たちの未来を変えるチカラとなった。

チラシや参加賞の作成



世界に届け！
服のチカラプロジェクト



かわいい箱を作成し、園に置かせてもらう



生徒感想文

市役所の子ども課さんと連絡を取り、館山市内のこども園さんや幼稚園さんに服のチカラについて説明して、服を集める協力をしてもらいました。最終的には目標の2倍以上も増えて地域の方々の優しさを感じました。ほとんどのことを自分たちで行い行動力を深められたと思います。

最初は人に話しかけたり、自分たちで何かを考えて行動したりすることができませんでした。でも、この授業を受けて人に話しかけたり、積極的にコミュニケーションをとることができるようになりました。それから、8人でまとまって何かをやり遂げる面白さを知りました。

【優秀賞】～小学生の部～天理市立前栽小学校（奈良県）

世界中の人が誰一人取り残されることなく、尊重される世の中になるように～命を届ける～

生徒による発表（小学6年生）

【プロジェクトへの参加のきっかけ】

5年生のときに新聞のワークシートを通じて、チリという国で大量の服が捨てられていることを知った。この事に衝撃を受け、服を大切にしようと思うようになった。出張授業で難民という言葉を知り、難民を救う活動に魅力を感じた。

【回収活動前】

- ・実行委員を中心に全校朝会でプロジェクトへの参加・活動の紹介を行った。
- ・地域や保育園の子どもたちに配るチラシやボックスを作り、服の回収をスタートさせた。

【学校内での活動内容】

★ユニクロTシャツの作成

模造紙で作ったユニクロTシャツに回収した服一枚につき、シールを一枚貼っていった。シールで回収の様子を伝えることができた。一日に何百枚ものシールを貼った。どんどんTシャツが仕上がっていきため、わくわく感が増してきた。

★服のチカラ新聞の作成

取り組みの様子を伝えるため、毎週「服のチカラ新聞」を発行した。写真を掲載し、低学年の子にもわかりやすく伝えた。ユニクロTシャツや新聞を作ったことで学校のみならず地域の人々が常に服の回収のことを意識してくれるようになった。

【地域での活動内容】

公民館に依頼し、ポスターを地域の掲示板に掲示した。地域の保育園などにチラシ・回収ボックスを届けた。

【地域と未来へつなぐ】

★地域へつなぐ

地域の人たちは「難民の人たちに何をすればいいかわからなかったが、このプロジェクトで自分も役に立てることを知り、嬉しい。」と話してくれた。今まではあまり意識していなかったが、地域の人たちのすごさを知り、地元を誇らしく感じられることができた。

★未来へつなぐ

回収された服の中には新しい服もあった。今は服が大量生産されている。多くの人が服を選べるようになり、服を買うことで楽しみが増えたり、経済がよくなるのはいいことだが、一方で、その結果捨てられる服が増えている。服を一着作るのに、お風呂11杯分の水を消費していることを知っているだろうか？捨てられる服を減らすために、リメイクする・回収ボックスに入れる方法もあるということを知ってほしい。

回収ボックスに入れると世界中の人が笑顔になれることを知った。

【まとめ】

活動を始めたばかりのころは不安なことも多くあった。活動をすすめていくうちに、不安なことから楽しいことへと変化した。世界中の人が誰一人取り残されることなく、尊重される世の中になるように、これからも行動をしていく。



生徒感想文

○約5か月くらいやって思ったことは、「人との交流の楽しさ」です。地域の公共施設(公民館子ども園など)や、地域の人との交流ができます。交流をしていくうちに、何だか**人と話をするのが楽しくなりました**。中学校へ行っても、このようなプロジェクトに参加したいです。

○「**服のチカラ新聞**」を毎週作りました。工夫したところは、アプリのキャンパを使い、写真を多く入れ、読みやすいように短い言葉で表したことです。毎週の新聞作りが習慣になっておもしろかったです。

○「そんなに服は集まらないんじゃないか」と思っていたのですが、毎日毎日たくさんの服が集まり、仕分けるために服をたたむのが楽しかったです。みんなたくさんの服を買っているんだなと思いました。中にはまさらな服もあり、もったいないなとも思いました。私たちが集めた服が、世界中の難民の子ども達に届いて喜んでくれるとうれしいです。

【優秀賞】～中学生の部～さいたま市立美園南中学校（埼玉県）

命と故郷 どちらが大切ですか？ 難民について学びを深め、伝えよう

生徒による発表（中学2年生）

……みなさん、想像してみてください。

あなたはいま、戦争に巻き込まれています。毎日爆発音や空襲警報が鳴り続けている。そんな中やっとの思いで国外に出ることができた。しかし、一緒に逃げたあなたの祖父や祖母が故郷に戻りたいと言い出した。たとえ命を失うことになっても、生まれ育った故郷で過ごしたい。と訴えている。さて、あなたならどうしますか？ 故郷に戻りたいという意見を尊重しますか？ それとも言葉の通じない国で命の安全を優先しますか？ ……

【活動テーマ】

私たちSSTC部では難民について学びを深め伝えよう。をテーマに活動をした。SSTC部とは……Social Science Technology Contributionの略で、パソコンスキルの向上、社会貢献を目的とした活動を行っている。服のチカラプロジェクトもSSTC部の活動の一環として参加しており、今年で3年目になる。

【活動内容】

難民について周りの人たちに知ってもらおう。ということ意識して活動を行った。昨年、服のチカラプロジェクトの活動を行った際、子ども服を集めることは知っているが、理由をはっきりわかっていない。という人もいたようだった。そこで、今年まずは自分たちが難民について学び、生徒や地域の方々に難民への関心を持ってもらい、学校・地域全体が主体となって活動ができればいいと考えた。

【難民に関する学び～ワークショップの実施】

夏休みにAAR Japan [難民を助ける会]の方にお越しいただき、ワークショップを開催してもらった。テーマは「命を失うことになったとしても、住み慣れた故郷に残るのか、避難して命の確保を優先するのか？>自分たちならどうするかを話し合った。すぐに結論を出せないことから、難民の方々の辛さ・心境をわずかながらに体感することができた。

その後下記3つのテーマを決めて調べ学習を行った。

- ① 難民の現状
- ② 足りないもの
- ③ 私たちにできること

それに費やした時間は20時間を超えた。学んだことをまとめてパンフレットとパネルを作成。全校集会で発表し、みんなに難民について興味を抱ききっかけを作ることができた。

【服のチカラとお金のカ～5日間におよぶUNHCRへの募金活動の実施】

「服を輸送するのにいくらくらいかかるのだろうか」仮に難民が一番多く暮らしているトルコに段ボール1箱送るのに、国内と国外への輸送費を合わせて5,000円くらいかとネットを使って調べ上げた。さらにそこには人件費もかかる。服を送り届けるには輸送や人件費にお金がかかることに気づき、募金活動を行った。5日間校内の正門に立ち、40,472円の募金を集めることができた。



大事な故郷をとるか、命の安全をとるか、実際にグループで話し合った

生徒感想文

私がとても印象にのこった活動は3点です。

○1点目は「文化発表会」で服のチカラプロジェクトを宣伝したことです。発表に向けては夏休みから部活動全体で役割分担をして発表用スライドの作成や原稿作成、発表練習などを何度も重ねました。

○2点目は地域の保育園や幼稚園、自治会に協力して行った服集めです。今年も服集めの協力の交渉を行い7か所すべてのところが協力してくださりました。また集めた服を中学校まで運んでくださったり、私たちが交渉に行く場所までの道案内をしてくださったりと、私たちが住んでいる地域の温かみも感じることができました。

○3点目は服たたみ、梱包作業です。1枚1枚たたむのが大変そうだと思っていましたが、引退した3年生の先輩方が助けに来てくださり、梱包作業がスムーズに進めることが出来ました。

【優秀賞】～中学生の部～岸和田市立北中学校（大阪府）

～自己肯定感・自己有用感の向上につながる取り組み～世界の人々のために、わたしたちにできることは何か～

生徒による発表（中学1・2年生）

【4月から7月まで：出張授業前】

★**知る活動**…学校給食におけるストローレス化が4月から始まり、その理由を知るところからSDGs未来新聞の発行をスタートした。朝のホームルーム時に先生と生徒みんなで読み、全校生徒でSDGsについての知識を増やしていった。

★**深める活動**…SDGsについて調べ学習をした。自分で調べることで、未来新聞で知った知識をより深めることができた。

★**共有する活動**…できることから少しずつ始めることが大切ということに気付き、自分が重点的に取り組もうと思う行動を各自3つずつ宣言した。廊下に掲示し、それを見ながら自分の写真を探したり宣言内容について意見交流したりする姿がみられた。

これらの活動を通して、遠くで起きていると思っていた問題を身近に感じることができ、普段の生活の中で、できることから少しずつ取り組むことが世界を変える第一歩となることを学んだ。

【回収活動：出張授業後】

中心メンバーとして55名が名乗り出た。話し合いの結果、3つのグループに分かれて活動することになった。

チーム①回収準備チーム…回収の告知をするためのポスターやちらし、回収ボックスなどを工夫しながら制作した。

チーム②回収活動チーム…校内では1週間、ブースを設置して回収した。校外での回収は公民館、町会館、近隣小学校2校の4か所。回覧板やチラシの配布、町内放送などで告知を行った。

チーム③選別・仕分けチーム…集まった服は1554着。思いが詰まった1着1着と、そこに込められた人の思いを感じながら丁寧に畳む作業を行った。

【活動の成果】

★**人とのつながり**…同じ目標に向かって努力する仲間、回収活動で交流した地域住民の方、服を受け取ってくれる世界の人々、とつながりを実感することができた。

★**波及性**…「もっと役に立ちたい」と、ペットボトルキャップを集めてワクチンに変える取り組みも進めた。さらに集めたキャップを使い、ペットボトルキャップアートの制作をした。

★**生徒の変容**…社会貢献できたことで、自己肯定感・自己有用感の数値が全学年において上昇した。生徒会への立候補者が大幅に増え、行事に積極的に参加する生徒も増加し、学校全体の活気が上昇した。

【今後に向けて】

自分に自信が持てなかったのが世界を変えるチカラさえ持っている、と思えるようになりました。

「自分にはいいところがある」

あたたかいところを贈ることで、私たちもあたたかいところを持てるようになりました。

この心を持って、世界をいい方向に変えていけるようこれからも発信し続けたいと思います。



【優秀賞】～高校生の部～岡山県立玉野光南高等学校（岡山県）

～難民の子どもたちに“届けよう服のチカラ”から、“もっともっと考えてみよう服のチカラ”へ～

生徒による発表（高校2年生）

玉野光南高校は普通科・情報科・体育科の三科があり、部活動がとても盛んな学校である。

【活動内容～企業との連携】

私たちの制服を製造している地元企業の制服のリサイクル活動に参加した。社員による制服とSDGsの講義を受け、卒業生や新入生に提供を呼びかけ、多くの制服を回収することができた。リサイクル規格外の場合は、試行錯誤し、アップサイクルを行い、小さな子どもでも簡単に作れるリボンやティッシュケースなどを作った。地域の公民館やSDGsフェアで参加者と一緒に作りながら資源の有効活用やSDGsについて考えるワークショップを開いた。

【プロジェクトの活動】

“届けよう服のチカラ”プロジェクトに参加することを決め、地元の小・中学校や公共施設、企業やショッピングモールなどに協力をお願いした。出張授業で学んだ難民とは何なのか、子ども服がどのように届けられるのかを、小学生にもわかりやすく伝えるため、動画を作成した。これらの活動は、地元紙の山陽新聞にも取り上げられ、地域の方が服を届けてくれた。

他にも、学区の演芸大会など、様々な機会を利用して呼びかけたことで、ダンボール40箱もの子ども服を集めることができた。同時に、この活動に参加していなければ、それらの衣服はどうなっていたのか・・・がとても気になった。

【衣服の現状】

環境省の調査によると、ほとんどの衣服が再資源化されていない。今回の回収活動で予想以上の子ども服が集まったのは、私たちの地域で少子高齢化が進み、行き場が見つからないまま子ども服が手元に残ってしまったのではないかと考えた。

そこで、食料品や日用品を24時間いつでも受け取れる岡山市のコミュニティブリッジで取材をした。これと同様の仕組みを、衣服でも行えないかと考えたのだ。しかし、衣服は食品よりも、仕分けや管理が難しく、サイズやデザインなど、個別のニーズに答えにくいとのことだった。

さらに私たちは、岡山県高校生議会に参加し、私たちが考えたような衣服のマッチングシステムや、リサイクルの仕組みが県で実施可能かどうか、質問・提案した。高校生の私たちができることとして、制服や子ども服にターゲットを絞り、卒業生から提供してもらった制服を、在校生がリユースする仕組みを考えている。

【まとめ】

高齢化といった地域の現状から、世界の難民問題まで課題を見つける力、自分たちに何ができるかを考え発信し、仲間を増やす力も身につけた。服のチカラは人のチカラ、小さなチカラでも合わせれば、大きな課題も解決できる。小さなことでもできることからやってみる。これが私達が身につけた実行力だ。これからも少しずつ規模を大きくしながら、できることを続けていきたいと思う。

山陽新聞に掲載された記事をご覧になった地域の方が、学校まで子ども服を運んで来て下さった。



課題解決に向けた取り組み②高校生議会：答弁

- Q1 食品以外で循環資源マッチングシステムを行う予定はあるか
- Q2 衣料品や繊維製品をリサイクルするための仕組みを岡山県が導入することは可能か



- A 循環資源マッチングシステムの運営(企業・事業者向け)
岡山廃棄物ナビの運営(Webでの情報発信)

生徒感想文

私たちは今回のプロジェクトだけでなく、この1年間で捨てられてしまう衣類のリサイクル・アップサイクルを通してSDGsを学ぶことができました。それらの活動で得られた知識や経験を活かして12月に行われる、岡山県高校生議会でも県の政策への提案と質問を行う予定です。

今回の回収活動を通じて、私たちは、自分で考える力・議論する力・活用する力実践的に身につけることができました。しかし、私が今回いちばん成長できたと思うのは、

○理想と現実のギャップを埋める力 を身につけたことです。

今回難しかったのは、考えを発表するだけだった今までと違い、実行にうつすことをしなければいけなかったため、理想的な案と実際それを行うにあたって可能かどうか話し合いを重ねました。社会的な課題を実際に解決していくには、「理想を思い描く力」と「現実的に考える姿勢」の両方が必要なのだと思います。さらに今回、現実的に考える中で私たちの地域の問題にも気づくことができ、自分の視野を以前よりもっと広げることができました。

【UNHCR特別賞】名古屋経済大学市邨高等学校（愛知県）

～ユネスコ平和の架け橋プロジェクト～市邨高校 x 台湾国立鳳山商工 x 埼玉県立越谷北高校
 国境を越えたパートナーシップ協定校とともに専門家から深く学び、地球市民として優しい心を育む

生徒による発表（高校2年生）

【パートナーシップ校協定の締結】

右上の図は、UNHCRグローバル難民フォーラムに提出された宣言である。戦争や紛争のない平和な世界をめざして、市邨高等学校、埼玉県立越谷北高等学校、台湾の鳳山商工学校の3校で国際平和活動を実践するためのパートナーシップ校協定を結び、世界平和貢献活動を実施している。



【活動について】

私たちは1年間を通して三つの活動を行ってきた。そして専門家を交えた学習と国際支援活動を3校で一緒に行っている。

①“届けよう服のチカラ”プロジェクト

ユニクロの担当者様と国連UNHCR協会様から現地のリアルな状況を目の当たりにすることで感情が相当に揺さぶられた。きっかけは服を集めることであったが、そこから興味関心が多方面に広がりを見せていった。

②パレスチナ難民女性の支援に取り組む林芽衣氏から学ぶ活動

難民女性が製作したバッグやアクセサリを販売することで、難民女性のことを多くの人たちに知ってもらおう取り組みをした。

③紛争が終わったカンボジアの絶対的貧困地域についての学習

心や体に障害を負った人々や、戦争の負の遺産についても学んだ。日本の学校には当たり前にある遊具がないことを知り、村の小学校に鉄棒を届けるプロジェクトを考え実行した。各国でチャリティー活動を行い、合計で約12万円を送ることができた。

服のチカラプロジェクトから、私たちは世界を知り、傍観者でいるのではなく、小さなことでも取り組むことができた。心の中に、平和のとりでを築くためにこれからも活動を続けて行く。

【台湾と交流して】

昨年、協定を結んでいる台湾の高校へ訪問した。オンラインで交流していた際は、コミュニケーションが大変だったが、一緒に活動をしていることで、勇気をもらい、自信にもつながった。

【「第2回グローバル難民フォーラム」日本から提出された宣言】

タイトル	内容	分野
対話と交流による学習を通じた難民問題と貧困問題の解決へのアクション 名古屋経済大学市邨高等学校	ICTを活用した双方向型の対話的な学びを通じて、パートナーシップ協定校（国立台湾鳳山商工高校・埼玉県立越谷北高校）間の交流活動を強化し、専門家、地方公共団体や企業の協力を得て、世界の難民問題・貧困問題とその解決を目指す取組について学び、さまざまな支援活動に参加し、問題の解決に貢献する。これにより生徒自身が持続可能な開発目標（SDGs）の各項目に横断的に取り組み、自己肯定感を高め、未来を切りひらく能力を開発する機会を創出する。	教育
包摂指標による働きやすい企業の評価・啓発 [Welcome Japan就労分科会・包摂指標委員会] 認定NPO法人Living in Peace パソルホールディングス株式会社 国立大学法人東京大学	組織が文化的多様性を価値と認識し、主体的な就労環境改善が推進される社会を創る。難民を含む外周にルーツを持つ人々の包摂をめざす職場環境評価指標「Cultural Diversity Index」で企業/法人の取り組みを認証する（目標：2024年に20法人を認証）。	就労 海外からの受け入れ
亡命知識人としての包摂・育成 [Welcome Japan 教育分科会・「亡命」委員会] 国立大学法人京都大学 合同会社madoromism	難民背景があり高度な専門性や技能を有する人々へのインタビューを行い、知見を広く発信し、セクターをこえて、日本における亡命知識人の新たな活動や仕組みを生み出す。勉強会やシンポジウムを定期的に開催し、研究者と実務家の協働を促進し、共生社会に向けたアイデアを共有する。多言語対応のメディアを運営し、難民をめぐる課題について議論する場、および研究者、実務家、難民当事者がそれぞれの思いや知的関心を共有し、協働によって見出される「知」を発信する。日本での「難民」イメージを刷新し、海外発信に向けたハブとする。	教育 意義ある難民の参加 文化 平和構築

3校で実施したオンラインで学習会の内容が朝日新聞・中日新聞(日本)・今日新聞(台湾)で掲載された。

